

書評特集・井頭昌彦著『多元論的自然主義の可能性―哲学と科学の連続性をどうとらえるか』

自然主義と「超越論的」問題について考える

佐藤 駿

今日に生きる我々は、哲学が「愛知」として、たとえ明確ではないにしてもすっかりとしたイメージを持ちえた古き良き時代を知らない。諸々の科学 (sciences) が「哲学」という名のもとから離れ、独り立ちしたあとで、今日「哲学」の名のもとになお残っているもの、それは何であるかと問われて我々はしばしば当惑する。一体そこにまだ何が残っているのか。いや、むしろ何も残ってはいないのではないか。――井頭昌彦による『多元論的自然主義の可能性―哲学と科学の連続性をどうとらえるか』は、哲学という標題のもとになお残されている「知」のあり方とその意味について再考するきっかけを与えてくれている。

本書はおおよそ次のような構造をしている。まず第一章において、クワインが「自然主義」のアイディアを導出した経緯とその根拠とを整理しつつ、その論拠だけから本来取り出されうる「最小限的自然主義」が定式化される。次いで第二章において、この最小限的自然主義に加えられうる存在論的オプシヨンのうち、主に物理主義的一元論的なそれを取り上げて批判的に検討、その問題点を剔抉し、第三章においていよいよ「多元論的自然主義」の構想が展開される。私が以下で検討してみたいと思うのは、その出発点に当たる部分、「自然化された認識論」の内容と性格、というよりはむしろ、その導出に関わる議論と「哲学」そのものの性格についてである。

最初に、私自身の立場と本書全体にわたる感想を述べておきたい。私はほとんどの場合、著者がそれぞれのトピックにおいて展開している一つ一つの議論を共感をもって読むことができた。「自然主義」と聞くと、反射的にしかめ面をしかねない気質の私としては（私がここで求められているものもまさにそういう人間として提出しうるコメントであると思う）、これは少し不思議なことであった。裏を明かせば、今回私が以下にまとめたコメントは、この現象を自分なりに理解してみようと考えてみた結果である。結論から言えば、著者の見解と正面から切り結ぶような内容にはなっていない。それどころか、ある仕方で著者の見解を解釈することが許されるかぎり、私はその見解に基本的に賛同することさえできると思う。問題は、この「ある仕方」であって、それについて著者がどう思われるか尋ねてみたい。

あらかじめ以下の論述を簡単に整理しておこう。まず私は、著者やクワインの言う第一哲学のコンセプトを手がかりとしながら、それとは異なる考え方、それとは異なる第一哲学のコンセプトの可能性を示唆し（第一節）、そのような哲学的問題の一例として、大雑把にはあるが、「超越論的問題」とでも表示できる問題を定式化する（第二節）。ところで、井頭がクワインの自然主義の内実を明らかにする際に、その論拠として提出している「体系内主義」の主張は、私がここで「超越論的」と呼んだ問題系に属する主張として読み解くことができるように思われる。この読みを簡単に示して（第三節）、最後に「哲学」そのものの自己理解について少し述べて本論を結ぶことにしたい。

一 「第一哲学」のイメージ

個々の特殊な存在者のクラスを扱う哲学の諸部門に対して、「存在を存在として研究」する哲学の部門（そして

おそらくは一種の神学)をアリストテレスは「第一哲学」と呼んだ^①。自然科学の胎動する時代に現れたデカルトは、その『哲学原理』の仏訳序文のなかで、自らの「形而上学(第一哲学)」が「認識の原理」を含み、ここには「神の主要な属性、我々の精神の非物質性、そして我々のうちにあるすべての明晰で単純な概念の説明が含まれる」と書いている^②。デカルト的モチーフを現代において引き受けながら、フッサールは「第一哲学への省察」を新たに始める必要性を説き、自らの「超越論的現象学」に対する体系的な入門書を書いた^③。

もちろん、彼らがそれぞれに「第一哲学」と呼ぶものは、その内実においても意図においても様々な点で異なっているであろう。こうした考え方の相違については、幸いここでは深く立ち入って論じることをしないでよい。それぞれのコンセプトに共通しているのは、それが他の哲学(科学)の部門とは、その主題や方法において異なっており、そうした部門に対して(その主題に関してであるにせよ、方法に関してであるにせよ)ある種の「プライオリティ」を持つということである。

だが、クワインや井頭が第一哲学について語る時、そこに思い描かれている哲学は、科学と主題を同じくしながらも、その方法において異なる哲学的学科であるように思われる。すなわち、それは「実在の探求」でありながら、科学的方法によるのではない仕方では正当化されねばならないような認識の謂いなのである。あらかじめ述べておくが、私は別にこのような第一哲学のコンセプトは奇妙だとか、間違っているなどと言いたいのではない。私が問いたいのは、クワインや井頭が描いてみせる第一哲学とは異なる第一哲学のコンセプトは十分可能なのではないかということ、いやそれどころか、このような第一哲学の議論、つまり、それ自身は科学ではなく、その意味で当然科学的方法によって正当化されるものでもないが、おそらくはまたそれゆえに科学的知識に対してあるプライオリティを持つ哲学的議論が行われる次元が成立しているからこそ、自然主義の主張がそもそも「主張」として可能に

なっているのではないかということである。

繰り返しになるが、クワインや著者がイメーজしている第一哲学は、「実在の探求」であり、それでいて科学に対しては明確なプライオリティを持つような主張の束である。「明確なプライオリティ」と言ったが、実際、クワインが念頭に置いている第一哲学はこの点ではっきりとした限定を持っている。それは、科学的知識に対する最終的（あるいは一番最初で）かつ決定的な一手を与えると称するような哲学であると言えるだろう。そしてクワインはそのような哲学としての認識論は存在しないと続ける。例えば、本書三四頁における引用中、彼は「自然主義」の主張を「第一哲学の放棄」と呼び、それを「自然主義は自然科学を超えたいかなる法廷にも訴えることができず、観察と仮説演繹法を超えたいかなる正当化の必要もないような、実在の探求と見なす」と敷衍している¹⁾。また、井頭も「実在が同定され記述されるのは、科学それ自体の枠内においてであって、何かそれに先立つ哲学においてなのではない」（四〇頁）と自然主義を要約している²⁾。

ここでの議論には、少なくとも次の二つの命題が関連している。

一 第一哲学は、科学とは異なる方法（正当化手続きなど）を要求する。

二 科学は、「実在の探求」として、科学（科学的方法）を超えたいかなる正当化をも必要としない。

ところで、おそらく著者とクワインにとってはこの二つの命題の連言は次を含意する。

三 第一哲学は不必要である。

他方、私は、一と二は三を含意しないと考える。言い換えれば、私は一と二が真であるとしても三を含意しないような第一哲学のコンセプトが可能であると考えている。クワインと井頭にとっては、第一哲学は科学とは異なる方法を持ち、かつ科学に対して「基礎づけ」を与えると称するものである。あるいはこう言ってもいいだろうが、第一哲学は、ある決定的な意味で「実在の探求」に資するものと考えられている。つまり、仮に科学が完成したとしても、「実在の探求」のほうはそうした探求として完成せず、なおある知的作業を必要とするのであって、これが「基礎づけ」であり、第一哲学の仕事であるというわけであろう。だから、「基礎づけ」のプロジェクトが頓挫したという事実は、第一哲学が無用の産物であるということを示唆することになるのである。だが、私の思うに、一と二を同時に主張しながら三を含意しないような第一哲学のコンセプトがおそらく可能であって、それは要するに、科学そのものに対してある種のプライオリティを持ちながらも、科学に対して実質的な「基礎づけ」を与えるということを自らの課題とするのではない、ような第一哲学のコンセプトである。

ポイントを今少し明確にしよう。実在を探求し、実在についての知識を完成させるのは科学の仕事であり、科学の確定する真理の総体が実在の総体を確定する。この点について、私はまったくその通りであるべきだと思っている。敢えて言うが、私は、今とりあえず歴史的・発生的な問題を度外視すれば、第一哲学であろうと何であろうと、哲学がなくても科学はそうした知識の体系として自立して存在しうると問題なく主張できると思っている。しかし、このことと、ある種の第一哲学的な知識の可能性とは別に矛盾するものではない。クワインや井頭が考えているような仕方では「実在の探求」に資するのではないが、それでもある種の「知識」を供給しえ、しかも科学的知識に対するある種のプライオリティを持つような哲学的問題系が存在するのではないだろうか。それどころか、そうした問題系からの一つの帰結としてのみ、自然主義は一つの主張として成立するのではなからうか。

二 「超越論的問題」

私はここでこのような哲学的問題系の可能性を、「超越論的問題」というものを定式化することによって考えてみたいと思う。

まずは、クワインの提案する「自然化された認識論」と従来の認識論との異同を説明するなかで井頭が触れている論点を手がかりにしよう。

以上のような「認識論の自然化」という提案は、認識論という営み自体を放棄することに等しいと考えられるかもしれない。というのも、認識論という分野が形成された際の問題意識のなかには「(科学的知識を含む)われわれの信念体系は妥当なのか」、「そうだとすればそのような妥当な知識はいかにして可能なのか」といったものも含まれていたはずだからである。このような疑問に答えるためには、妥当性を問われている当の科学的知識を前提せずに「知識の可能性」を示さねばならないはずであり、クワインのように科学的知識を認識論的探究に利用するならばこの問いに取り組むこと自体が不可能になってしまわないだろうか(二二頁)。

著者はこのように述べたうえで、それでもクワインの提案する自然化された認識論が「証拠と理論の関係を理解する」という課題を旧来の認識論と共有しているという点を指摘して、そこから両者の連続性を取り出している。さしあたり、私の関心はそこにはない。むしろ私の問いは、『(科学的知識を含む)われわれの信念体系は妥当なのか』、『そうだとすればそのような妥当な知識はいかにして可能なのか』という問いはどこに行ったのか、というそれである。

今日「知識論」とか「認識論」と呼ばれている哲学の分野には、哲学そのものがそうであるように、種々のスタイルの考察が含まれている。プラトンによってすでに始められた「知識とは何であるか」という問いは、今日なお哲学上の一つの専門分野として成立しているように思われるし、デカルトに端を発すると思われる知識の「基礎」の問題（そうしたものがあるのか、あるとしたらそれは何であるのか、そもそもそうしたものはないのかといった問いに関わるもの）は、信念の正当化の構造の分析としてやはり現代哲学に引き継がれているように思われる。これらと密接に関連する問題が「知識の可能性」についての問いであり、歴史上この種の問いに「超越論的」という形容を与えたのはカントであった。^⑥

今少しく単純化して言えば、それは次のような一般的形式を持つだろう。

超越論的問題…（あるクラスの）知識が可能であるためには、どのような条件がアプリアリに成り立たねばならないか。

この問いに携わる人は、まさに問題になっている（クラスの）知識をこの問いに答えるなかで前提してはならない。問われているのは（そのクラスの）知識の可能性であって、可能性が示されないうちに当の知識の現実性を持ち出すことは、まさにここで問われている問題を誤解することにはかならない。可能ですらないものは決して現実的ではありえないという一般的な意味で、可能性は現実性に対する本質的なプライオリティを持つが、超越論的知識（知識がいかにして可能であるのかということに関する知識）が通常の科学的知識に対するプライオリティは、まさにこの点に成り立つことになるだろう。

誤解のないように注意しておきたいのだが、「知識の現実性を前提してはならない」ということは、今我々が現に有している知識を否定してかかれということではないし、ましてやそうした知識が実は幻想であると主張することなどではもちろんない。あるプログラムの仕組みを知りたいと思っっている人は、そのプログラムが実際に走るときに、このことを否定する必要はない。むしろ一般には、その仕組みに対する関心が生まれるのはそれが実際に走るから（あるいは走るべきはずだから）であろう。ただ彼が知りたいのは、そのプログラムが実際に走ることではなく、そのプログラムが走るためにはそもそも一体何がどうなっていなければならないのかということなのである。

私は上の定式のうちに「アプリアオリに」という条件を付加したが、この点についても注意を付け加えておこう。もちろん私は、この語を「生得的 (innate)」という意味では用いていない。また、どんな種類のものであれ、怪しい世界観に基づくような含みを持たせたくない。私はこの語を、とりあえずここでは消極的に、その主張の正当化が経験に訴えて得られるのではないようなあらゆる主張の認識論的ステータスを表現するために用いる。そうすると、私は超越論的問題に関して行われる主張（仮に「超越論的主張」と呼んでおく）を次のように定式化することができらるだろう。

超越論的主張・（あるクラスの）知識が可能であるための条件について、その正当化が経験によってなされるのではない仕方ではなされる主張。

このような主張が実際に存在するならば、確かにそれはある種の「認識論」に属する主張であるが（先の引用を

参照)、しかし「自然化された認識論」には属さない主張であることになろう。今、仮説演繹法(実験的方法)を「経験による正当化」の典型と見なしてよいならば、超越論的主張は井頭の構想する自然主義のうちには属さない。逆に言えば、自然主義そのものはいかなる超越論的主張も行いうことができない。

さて、次節で見るように、私は井頭がまさにその立場——「仮説演繹法による以上の正当化を認めない」という「最小限の自然主義」——を導く過程で導入している「体系内在主義」の主張そのものが、一種の超越論的主張になっているのではないかと考えているが、あらかじめ誤解のないように断っておくと、私はそのような疑問を提起することによって、自然主義が自己論駁的だなどと言いたいのでは決してない。むしろ私が指摘したいのは、自然主義が一種の超越論的主張から導き出される立場として読み解くことはできないかということであり、そしてもしそれができるならば、哲学と科学との関係に関して、井頭が描くのととは別の描像を描きうるのではないかということがある。

三 超越論的主張としての体系内在主義

井頭の整理によれば、クワインがその自然主義を導出するために引き合いに出しうる論拠は以下の二つである(二四頁)。

- 一 理論的な用語を一般的に現象の用語で定義できるという考えに対する絶望。
- 二 unregenerate realism、すなわち、科学内部にある克服可能な不確実性を超えたいかなる不安も感じたことがない自然科学者の健全な心の状態。

とりあえず一については措こう。ここでは二について考えてみたい。著者はこの“unregenerate realism”を引き合いに出すことが直ちに一般的な説得力を持つものではないと考えたうえで、これを「体系内在主義」の主張として読むことを提案している(三七頁)。それはクワイン自身の言葉から次のように定式化されよう。

体系内在主義・概念化されていない実在との客観的比較を行うことはできず、ある概念図式が実在の鏡として絶対的に正しいかどうかを探る、ということは無意味である(同所)。

井頭自身による説明も引用しておくのがよい。

……われわれの信念体系と「世界」(ないし「実在」)とを比較しようとするときには、その「世界」は何らかの仕方で記述されていなければならない。このことが意味しているのは、比較対象として持ち出される「世界」は何らかの信念体系において記述されるものでしかありえないのであって、信念体系ないし概念体系から完全に独立した〈世界そのもの〉との照らし合わせによってわれわれの信念体系の是非を論ずることなどできない、ということである(三八頁)。

見られるように、体系内在主義は、我々は自身の信念体系を言わば「生まの実在」、あるいは「世界(自体)」と比較することなどできないという主張であり、この主張は、我々がそうした比較を試みるときには、世界はすでに何らかの仕方で概念化されているのでなければならぬという洞察のうちにその根拠を持っている。問題はこ

「なければならぬ」の持つ性格である。

我々がまず明らかにしなければならないのは、この主張は、それ自身実験的方法によって正当化されるような仮説ないし主張として提出されているのか、それともそうでないのかという点である。一見するかぎり、私には後者であるように思われる。もし前者であるのだとすれば、それはひょっとしたら改訂されることもあるかもしれないという性格を持つ主張であることになるが、少なくとも私には、そうした事態を想像できない。そもそも、この種の「ねばならない」を伴う主張は、いろんな経験を集めてはじめてまともに主張されるにいたるようなものではないように思われる。「比較対象として持ち出される『世界』は何らかの信念体系において記述されるものでしかありえない」という主張のこの「ありえない」も同様であって、それは「私もできないしみんなもできない」という観察に基づいて出てくるものではないだろう。かといって、それは（カルナップ的な意味で）「提案」であるということもなさそうである。いずれにせよ、もしこの主張が経験的に正当化され、それゆえにまた改訂可能でもあるというそうした性格を持つならば、それが実在との照合を要求するような懐疑論者に対する論駁としては機能しないことは明らかであろう（三八頁以下を参照）。なぜなら、「実在との比較ができない」という主張が改訂可能な主張であるとするならば、結局は懐疑論者の疑いが現実味を持つということも場合によってはありうることにになってしまうからである。

そこで私の理解するかぎり、体系内在主義は、知識のマトリクスを構成するような我々の信念体系が「(経験的にではなく)原理的に言っている」というたぐいの主張であるように思われる。そして、こうした性格を持つ主張が、まさしく私が上で「超越論的」と呼んだ主張なのである。それは、知識構成的な体系のあり方が「そもそもいかなるものでなければならぬのか」ということに関するテーゼであって、それがあつた種の事柄は「不可能」

だと主張するとき、この主張が意図された意味を持ちうるのは、それが経験的に正当化されるからではない。もし、経験的に正当化される（仮説演繹的に正当化される）ものの体系を、体系内在主義のいわゆる「体系」と見なしてよいならば、こう言ってもいいだろう——体系全体そのものの原理的であり方に言及する主張は当の体系内部に属さない。なぜならそれは、上で見てきたことが正しいとすれば、経験によって正当化されるものではないからである。

もう少し一般的な観点からも見ておくことにしよう。クワインが体系内在主義の主張を提示する際に引き合いに出しているノイラートの比喩が役に立つ^⑦。ノイラートの主張（言明と比較されるのは言明のみである）は、言明と「世界との比較」は不可能だということを含意している^⑧。他方、例えばシュリックはこれが可能でなければならぬと考え、かつまさにその問題こそ「基礎」の問題なのだ^⑨と主張した。少しややこしいのだが、このような基礎づけ主義的な「世界との比較」はクワインの言う意味で「第一哲学」的な主張であると同時に、我々の言葉で言えば、確かに超越論的な問題系に属する主張であると見られることもできる。というのも、それは、ある信念体系が知識という身分を持ちうるためには非信念的（非言明的、非命題的、非概念的）な世界との比較を許容するので「なければならぬ」、要するにそのような比較可能性は経験的知識の可能性の条件なのだ^⑩と主張していると解釈することもできるからである。この二面性を踏まえたくうえで、そうした比較は不可能だという反対の主張を考えてみよう。比較は言明間のみ可能だとするこの主張は、確かにクワインの言う意味で「第一哲学」の放棄をもたらすかもしれないが、しかし他方で、それは同時に我々の言う意味で超越論的問題系に属する主張であるように思われる。なぜなら、それは知識の体系たりうる信念の体系について、それがこのようなもので「あらざるをえない」と主張しているからである。そして、超越論的問題系を、あるいはこれをその部分として持つような第一哲学のコンセ

プトが可能であるならば、クワインが放棄せよと迫るのは、この第一哲学ではない。それどころか、まさにこの種の問題系から汲みとられる知識こそが、自然主義そのものの立場を正当化しているとさえ考えられるのである。

四 ままとめと結び

私が今上で行った議論のポイントを簡単に要約しておこう。

- 一 自然主義は、その前提として体系内在主義の主張を含んでいる。
- 二 体系内在主義の主張そのものは、経験的に正当化されるのではないような「なければならない」を含んでいる。
- 三 したがって、自然主義それ自身は経験的に正当化されるのではないような内容を持つ。

あるいはもっと端的に次のようにまとめてもよいだろう——自然主義者が「自然主義者」というまさにその身分で、自らの主張を正当化することはできないのである。

このことは、自然主義という立場の不整合を示すものでは必ずしもない。自然主義の主張は、自然科学はそれ自身で完結した実在についての知識を我々に与えるというその核だけ取り出せば、別に何の矛盾も含まないだろうし、おそらくはどんな人の機嫌を損ねもしないだろう。問題は、この立場自身がどこから導かれるものであるのかという点である。私がここで示唆してみたと思うのは、それがある種の超越論的な問題系に属する議論に由来するのではないかということであり、さらに言えば、その問題系が実はある種の考え方における「第一哲学」的な問

題系として特徴づけることができるのではないかということであった。簡潔に言えば、自然主義という主張そのものが一種の第一哲学に属する主張なのではないか、ということである。少なくとも自然主義の主張そのものは、井頭がその正当化を試みているその仕方から言えば、経験的に正当化されうるような主張ではないように思われる。加えて、それが「实在の探求」、实在についての真正な知識についての可能性の条件についての主張を含んでいる以上、その種の知識の現実性に対するプライオリティを含んでいると考えて差し支えないであろう。¹⁰⁾

むろん、このような議論(超越論的問題系)を「第一哲学」と呼ばねばならないのかどうかはそれ自身別個の議論を必要とするだろう。しかし、それについて議論するいとまはない。重要なのは、「自然主義」という立場自身の自己理解であり、もう少し一般化していえば、哲学の自己理解である。

私は、最初に述べたように、著者のほとんどの見解に賛同できる。それどころか、すでに述べたような理由で、その「自然主義」に反論したいとも思わない(もちろん、私の理解が間違っている可能性は大いにあるけれども)。自然主義という立場そのものがある種の哲学的議論の賜(決して皮肉を込めて言っているのではない)であるということだけが、ここで私の指摘したい点である。もしかしたら井頭と対立するかもしれないが、最後に私の意見を少しだけ述べさせてもらえらるなら、まさにこうしたかたちで(様々な)哲学が存在しているのではないかと思うのである(「様々な」というのは、自然主義を導出することだけが哲学の仕事なのではおそらくないからである)。自然主義は、そうした様々な哲学的議論の一部から、その結果として出てくるものであろう。そして、繰り返しのなるが、私は「自然主義は自己論駁的だ」とか、「その立場では扱えない議論領域が哲学にはある」とか、まして「だから自然主義は間違っている」などと言いたいのではない。ある議論から、まともな議論によってある結論が導かれるとき、その結論は真正な主張である。それゆえ、もし著者の議論がまともな議論であるならば、その結論

としての自然主義は真正な主張である。だが、それが真正な主張であるのは、それに先立つ議論があるからであって、その議論は、いわば登り終わったら外されてもよい梯子のようなものではない。梯子はむしろ、誰もがそれを登ることができるようにずっとかけられておかねばならない。そして場合によっては、その梯子が実は使えない梯子だということが示されることもあるかもしれない。クワインはこの事態を指して「開かれた結論」と言うのだろう(三二二頁)。問題はそれがどの次元(主題と方法の組)に開かれているのかということである。何にせよ、哲学をこのようなものだと認めることができるならば、ある種の真正な哲学的議論(自然主義的に正当化されるのではないが、何らかの仕方では真正な主張として認められるような主張の応酬)と自然主義(仮にこれが正しいとして)は対立しない——むしろ補完し合っていると考えることすらできるのではないかと思うのである。

井頭が本書で明らかにしたものの、そしてそこから論じ出したもの、これについてその哲学的に重大な寄与を疑う人はいないであろう。しかし、その問題の背後に垣間見える射程のゆえに、私としては、井頭の思い描く「哲学」そのもののイメージと理解について、なお求めざるをえないところがある。

注

- (1) アリストテレス『形而上学』Γ巻、第一章(出隆訳、岩波文庫、上巻、二〇〇九年、一一二頁)。
- (2) *Oeuvres complètes de Descartes, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, tome IX-2, 14, 16.* (山田弘明ほか訳『哲学原理』さくせき学文庫、二〇〇九年、二五頁、二七頁)
- (3) Edmund Husserl, *Cartésiansche Meditationen*, hsg. von Elisabeth Ströker, Felix Meiner Verlag, 1995, 7. (浜嶋辰一訳『デカルトの省察』岩波文庫、二〇〇一年、二四頁)
- (4) 単に頁数のみが示されている場合、それはすべて『多元論的自然主義の可能性』を参照するものとする。

- (5) 今歴史的な観点から簡単に考察を加えるなら、ここで問題となっている「自然主義」という立場の可能性は、そもそも「科学」の成立を必然的に前提しているということが分かる。実在が科学それ自体の枠内において同定されねばならないという主張のうちには、「科学」と他の知識のあり方を明確に区別する基準が存在するという主張が暗黙のうちに含まれているが、もちろん、この基準は科学が自らの道を進むゆえんとなったもの、すなわち「方法」に求められる。自然主義は、私の見るかぎり、実在の探求としての「科学」の自律性を尊重・擁護する立場なのである。
- (6) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, hrsg. von Jens Timmermann, Felix Meiner, A11f./B25. (原訳『純粹理性批判』平凡社ライブラリー、二〇〇五年、一三三頁) 本論における定式化は、「超越論的」というこの語をカントがそう用いた仕方です。定式化することを試みるものでは必ずしもなごことを断っておく。
- (7) Otto Neurath, "Protocol Sentences," in A. J. Ayer (ed.), *Logical Positivism*, The Free Press (1959), 201.
- (8) Otto Neurath, "Physicalism," in Robert S. Cohen & Marie Neurath (eds.), *Philosophical Papers*, 1913—1946, Oxford University Press (1983), 53.
- (9) Moritz Schlick, "The Foundation of Knowledge," in *Logical Positivism*, 226f.
- (10) もしかしたら我々は、なぜクワインが「絶望」や「健全な心の状態」に訴え、特別な論証に訴えなかったのかを考える必要があるかもしれない。

(ちとつ) しゅん・東北大学大学院専門研究員)